

氏 名	広 崎 彰 良 ひろ さき あき よし
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 594 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	妊娠時における血小板減少性紫斑病に関する研究 ——実験的血小板減少症を中心として——

論文調査委員 (主 査) 教 授 脇 坂 行 一 教 授 深 瀬 政 市 教 授 西 村 敏 雄

論 文 内 容 の 要 旨

血小板は、周知の如く、止血機構において重要な地位を占める細胞であり、血小板数の critical level 以下への減少は、しばしば特有の皮膚粘膜出血を招来する。当然のことながら、妊娠時に血小板減少症が合併することが懸念されるのであるが、1867年に Barnes が妊娠に合併した血小板減少性紫斑病をはじめて報告して以来、この合併例の報告は数十例にみたない。そこで著者は、モルモットを用いて実験的に血小板減少症を惹起せしめ、妊娠時および非妊時においてそれぞれどのような影響が現われるかを知ろうとした。

方法：1% EDTA を 1/10 容としてモルモット心より血液を採取し、冷却遠心分離器を利用してこの血漿から可及的純粋な血小板を得るように努めた。得られた血小板を 0.85% NaCl 溶液に浮遊させ、これを家兎耳静脈より注入して家兎を感作した。この感作を 6 回施行し、抗モルモット血小板家兎血清を作成した。ついで、この抗血清を妊娠モルモット群と非妊娠モルモット群とに感作させ、両群における血小板減少率と出血症状を観察した。

成績：抗血清をモルモット心臓内および腹腔内に注入したところ、両群ともに血小板数の顕著な減少が認められた。しかしながら、その減少率においては両群の間に有意の差は認められなかった。

一方、抗血清感作24時間後に開腹してみると、両群ともに腹腔漿膜、大網等において特有の点状出血斑が認められたが、その出血の程度は妊娠群の方が明らかに軽微であった。又、同じく抗血清感作後の皮膚における出血状態も妊娠群の方が軽微であった。

これらに対し、抗血清をモルモット血小板で吸着した血清を用いた対照群では、いささかの出血も認められず、血小板減少率もごく軽微であった。

他方、血小板数 Prothrombin Time, Partial Thromboplastin Time, および Eu globulin-lysis Time を調べたが、いずれも両群の間に有意差は認められず、微小血管透過性に関しては、妊娠群の方が非妊群より低下していることが認められた。

考案および結論：血小板減少性紫斑病はさほど稀な疾患ではなく、しかも若年の女性に多いとされている。しかるに、妊娠時に血小板減少性紫斑病が合併することが意外に少ないということは、症例報告者によってしばしば指摘されてきた事実である。この点に着目した著者は、モルモットを用いて免疫学的方法で血小板減少症を起させ、上述の如き実験を行なった。

今回のモルモットにおける成績では、抗血清感作後の血小板数の減少率においては妊娠時と非妊時との間に有意差は認められなかったが、それに付随して生じたと考えられる出血の程度は、妊娠時の方が明らかに軽微であった。即ち、妊娠時には、血小板が減少しても、紫斑として出現しにくいものと考えられる。

紫斑という症状をきたす原因として、ひとつには血液性状、いまひとつには血管壁の態度があげられようが、著者のモルモットにおける成績では、妊娠時の微小血管透過性は、非妊時に比して低下していることが認められた。

以上の結果から、妊娠時には血小板数の減少がかなり強くても出血斑として発現しにくく、この機序の一端に微小血管透過性の低下が関与しているものと推論した。

論文審査の結果の要旨

血小板減少性紫斑病は、さほど稀な疾患ではなく、しかも若年の女性に多いとされている。しかるに、妊娠時にこの疾患が合併したという症例の報告はきわめて少ない。この点に着目した著者は、動物を用いて実験的に血小板減少症を惹起せしめ、さらに血液学的に若干の検討を加え次の結果を得た。まず、抗モルモット血小板家兎血清を作成し、これを妊娠モルモット群と非妊モルモット群に感作させたところ、両群ともに顕著な血小板減少が認められたが、その減少率においては、両群の間に有意差は認められなかった。しかし、皮膚および腹腔漿膜における出血の程度は、妊娠群では非妊群に比し明らかに軽微であった。この原因を追求すべく、抗血清感作前の血液性状および微小血管透過性を妊娠群と非妊群の間で比較してみたところ、血液性状には有意差は認められなかったが、微小血管透過性に関しては、妊娠群では非妊群に比し明らかな低下が認められた。以上の結果から、妊娠時では血小板数の減少がかなり強くても出血斑として出現しにくく、この機序の一端に微小血管透過性の低下が関与しているものと推論した。以上の内容は妊娠時における血小板減少性紫斑病の極めて稀な原因の一端を究明したものである。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。